

外国人として生きた 10 か月間

皆様こんにちは、大瀧です。いよいよ最終レポートの日になってしまいました。帰国してから約 1 か月が経過しましたが、私はいつまでたってもこの酷暑に慣れません（笑）。毎日汗だくになりながら過ごしています。まるで「これが日本の夏だ」と天から言われているような気分です。今回の最終レポートでは、毎回の書き方とは少しスタイルを変えて、様々な項目ごとに分けてお話をしていきたいと思います。長いですが、興味のある方はぜひ最後までご覧ください。

1. 語学力と言語環境

こちらを気にされる方が一番多いのではないのでしょうか。実際に私が行った今回の留学も、主に中国語力の向上を目的としたものでした。結論からお話すると、この 10 ヶ月を通して語学力はかなり向上したと思います。以前の月次レポートでも少し触れましたが、結果的に HSK5 級程度の中国語レベルで最終帰国日を迎えました。留学前の私は、HSK を受験したことすらなく、大学の簡単な第二外国語のコースを修了しただけのレベルでした。簡単な会話は問題ないものの、知らない表現は山ほどあり、「中国語が出来る」とは胸を張って言えないほどでした。

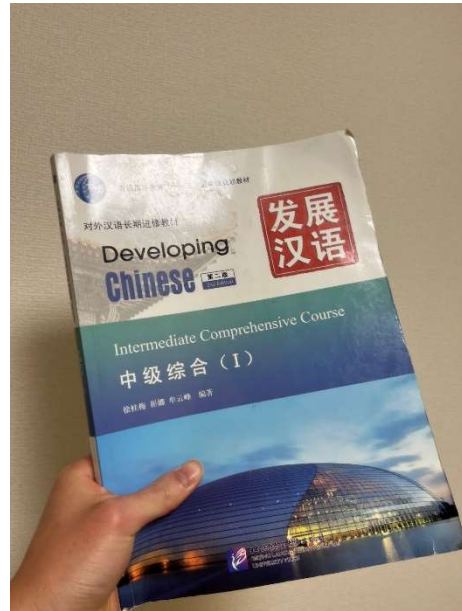
ところで私ですが、実は中国語との付き合いは非常に長いです。私は、中国出身の祖父を持つ、いわゆるクォーターとして日本で 20 年以上暮らしてきました。幼い頃から中国にいる親戚と何度か会う機会があったのですが、専らバイリンガルである父の通訳を介しながらやり取りをしていたため、幼少期に中国語が身につくことがないまま育ち、自分の名前すら中国語で言えない状態で高校に入学しました。高校 2 年生のころ、第二外国語の授業で初めて中国語を学び始めました。それから大学時代まで少しずつ学んではいたものの、大学の専攻とは直結しない分野だったため、中国語とは少し疎遠になりながら過ごしていました。就職活動をしていく中で、いつか中国語を活かして仕事をしてみたいという想いと、自分のルーツがある国の言葉をもっと理解できるようになりたい気持ちが高まり、大学を休学して留学を決断しました。

そんな想いの中開始した留学生活ですが、かなり言語環境に恵まれたものだったと思います。幸い文法知識の基礎がある状態で渡航したため、クラス分けで中級クラスに入ったことが大きいと思います。様々な国からの留学生がいましたが、教室内の共通語は一貫して中国語でした。英語を使用することは全くと言っていいほどありませんでした。また、毎年数人はいる日本人学生が、今回は私 1 人だけだったこともあり、日本語に頼ってしまうことが殆どなかったのも要因の一つだと思います。加えて、上海や北京のような国際都市とは異なり、街中で英語は全く通じません。生きるためには中国語を話さないといけないような状況でした。こうして中国語で生活する環境を担保できたことで、決して楽な道の

りではありませんでしたが、中国語力はかなり向上させられました。



2016年に中国を訪れた際の一枚
当時中国語は全く分かりませんでした



留学中使用していた教科書
とにかく頭に叩き込みました

2. 食生活

こちらも留学生活でよく話題に上るものだと思います。「中国の食べ物って辛いものばかりなんじゃないの？」とよく心配そうに質問されることがあります。渡航前、現地での食生活を気がかりに思い、プレゼントで太田胃散を頂くこともあったほどです。実際に生活してみて分かったのは、「辛いものは確かに多いが、いくらでも調節できる」ということです。勿論、日本よりも辛いものは多く、辛さのレベルも1～2段階高いことが殆どです。しかし、大抵「不辣・微辣・中辣…」のように辛さのレベルを選択できますし、辛くない食べ物も多く存在します。中国料理を食べる気分でなければ、マクドナルドやピザハットなどのなじみ深いチェーン店も多くありますし、洋食屋もすぐ見つかります。いくらでも食の選択肢が広がっている環境ではあるので、ご自身の許容範囲に合わせて生活が可能だと思います。



とある飲食店でのメニュー表です
辣度（辛さのレベル）が選択できます

また、面白い気づきもありました。それは、「食文化は常に姿を変えながら世界に広まっていく」ことと、「姿を変えた食文化は、元の文化の発祥地に逆輸入される」ということです。例えば、皆さんが「中華料理」という言葉を聞いてイメージするのは、焼き餃子やラーメン、チャーハン等だと思います。これらは全て、日本式の中華料理なのです。本場の中国料理にもそれらはあるものの、あまりにも姿が異なりすぎて、同じ食べ物だとは言い難いものがほとんどです。餃子は99.9%水餃子（写真左）ですし、ラーメン（拉面 lāmian）は細く伸ばした白い素麺（写真右）のようなものです。



しかしながら、これらが異端として中国で嫌われているかと言えば、全く違います。むしろ、「日式中餐」や「日式中国菜」（＝日本式中国料理）と呼ばれ、本場中国人に愛されているといっても過言ではありません。日本式の中国料理だなんて、回りくどい不思議な言い方ですよ。ただ、これは日本式中華に限ったことではありません。韓国式のジャージャー麺（写真左）も、中国の炸酱面 zhájiàngmiàn（写真右）にルーツを持つものですが、こちらも「韩式中餐」と呼ばれ、韓国式中華として中国のみならず、今や世界各国で親しまれています。



我が国日本の食文化に目を向けてみても、同じことが言えると思います。日本食の代表とも言える寿司ですが、全く同じ姿の寿司が海外で食べられているかと言えば、そうではありません。欧米の方が好んで食べるのはアボカドやとびっ子を使用した甘い味付けの巻き物が多いと思います（最近は海外でも日本と同じようなものが増えつつありますが）。これらが日本で嫌われることはなく、むしろ我々は「カリフォルニアロール」などと名付け、それはそれとして受け入れているのではないのでしょうか。このように見てみると、食文化はもとの形のまま異国の地に伝わるのではなく、そこにいる人々の風習や嗜好と融合しながら姿を変えていく。そしてそれが、元の文化の発祥地へ逆輸入され、新たな形として楽しめるものだと言えるかもしれません。

3. 外国人として生きる、そして異文化を理解すること

さて、タイトルにもあるメインの話題を深掘ってお話していきたいと思います。毎月のレポートでは、留学生活の楽しい様子ばかりをお届けしていましたが、今回は私が実際に感じたネガティブな側面も少しお伝えしたいと思います。この10か月間、私は外国人として生活していました。先ずお伝えしたいのが、どんな場所であれ、マイノリティとして生きる以上、多少の生きづらさや違和感は覚悟する必要があるということです。

最初にそれを感じたのは、留学開始 2 日目のことです。その日、1 人で街中の小籠包屋に行きました。拙い中国語で一生懸命注文をしていると、店員は私が外国人だと分かったのか、「你是哪国人？」（＝あなたどこの国の人？）と聞かれました。興味をもってくれたのか、そこから怒涛の質問ラッシュが始まります。しかしそれは、言い方を選ばずに言うと、よそ者を好奇の目で見るようなものでした。ただ、相手の質問を聞き取れなかったり、自分が言葉に詰まったりすると、最終的に「あなたの中国語はダメだね」と呆れた顔で言い放たれました。私の中国語力が原因のことですし、今となっては笑える出来事ですが、当時の私にはかなり衝撃的でした。また、現地の中国人学生やタクシー運転手と会話をする際、私の日本人訛りの中国語を聞くと、必ず「你是哪个国家的？」「你是哪的？」（＝あなたどこの国の人？）とかなりの確率で聞かれました。またある時には、街中で他国の留学生と中国語で会話をしていると、ニヤついた顔で「ねえあの人たちどこの国の人だと思う？（笑）」とヒソヒソ話をされることもありました。

ただ、彼らは悪気があってそのような言動をしているのかといえば、ほとんどの場合そうではないと思うのです。それは、もともと透明だった水の中に、ある日突然一滴の濃いインクが落ちたようなものではないでしょうか。現地の方だけで構成されていた環境に、突然異質なものが飛び込んだわけですから、そのような反応をされるのも当然のことだと思います。ましてや、太原は上海や北京とは異なり外国人が比較的少ない都市のため、私のような留学生が珍しく映るのも無理はありません。珍しいものに興味がわき、それをもっと知りたいという想いから来る、ごく自然な反応だったことでしょう。ただ、その状況を幾度となく経験し、また相手の聞き方次第では、どうしても好奇の目で見られているような、あまり心地よくはない感覚に陥ってしまうことが何度かありました。それをどう感じるかは多少なりとも個人差があるとは思いますが、ただ、異国の地で暮らすことを自ら選択した以上、仕方ないと割り切って生活していく必要がありましたし、今後留学を控えている方はそれを念頭に置いておくのが良いと思います。

話は少し変わりますが、皆さんにとって「異文化理解」とはどのようなことでしょうか。私はこの留学を通じて気付いたことがあります。それは、異文化を理解するのは、相手と同じ価値観を持ったり、相手の意見に賛同したりするのではなく、異なる文化をそのまま一度受け入れ、違いを認識したうえで両者が歩み寄ろうとするのが重要なのではないかと、ということです。どこかで誰かが似たようなことを言っていたなと記憶を遡ったところ、高校時代に学んだ現代文の一節にたどり着きました。鷲田清一さんの『臨床とことば』の中に、「他者の理解においては、同じ想いになるのではなく、じぶんにはとても了解しがたいその想いを、否定するのではなくそれでも了解しようとおもうこと、つまり、その分かろうとする姿勢にこそ他者はときに応えるということである」という記述があります。本当にその通りだと思います。

この 10 か月間の中で、私は数多くの異文化に接してきました。それは、中国

文化に限ったことではありません。世界各国から来た留学生の多くが持つ「当たり前」は、私が日本で育んできた常識とは異なることが非常に多くありました。時間や約束事に対する捉え方をはじめとして、これまで普通だと思っていたことが、そうではない状況に何度も遭遇したのです。そうなったときには、少し立ち止まって、まずは相手の考えに耳を傾けてみるのも大切だと気付きました。そして、自分の価値観を決して相手に押し付けようとせず、なんとか折り合いをつけて、歩み寄っていく方法を模索していくことが重要です。

4. 最後に

最後までご覧いただき本当にありがとうございました。これまでいろいろなこととお話しましたが、私はこの留学を決意して本当に良かったと思います。留学を通じて、語学力の向上は勿論のこと、大切な仲間に出会い、自分自身を成長させることができました。それと同時に、人の温かさに何度も支えられました。到着直後、慣れない環境に不安な中沢山話を聞いてくれた初めての友達や、就職活動でくじけそうになった時に、クラスメイトから貰ったエールの言葉の数々は、決して忘れることはないでしょう。今回この素晴らしい機会を与えてくださった埼玉県国際課と山西大学の皆様、そしてそれを支えてくれた日本の家族や友人たちに、改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。それではまたどこかでお会いしましょう。后会有期！



最終日空っぽになった寮



飛行機からの空